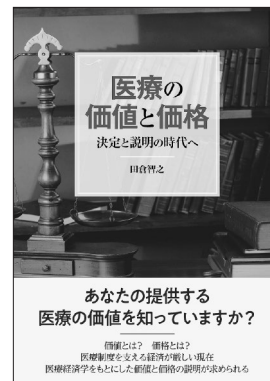


BOOK Review

医療の価値と価格 決定と説明の時代へ



評者 安藤 高夫 医療法人社団永生会理事長／衆議院議員

世界に冠たる社会保障制度は日本を世界一の長寿国にしました。医療保険、介護保険によって誰もが適切な医療や介護をいつでも受けることができるようになり、日本国民は長年の願いである長寿を手にしたのです。ただ一方で、人々の寿命が延びたことは高齢化をもたらし、今度は皮肉なことに医療・介護保険制度の持続可能性を問われることになりました。

国政においては、「全世代型社会保障改革」を実現するため、2019年に介護保険制度改革（高額介護サービス費等）、2020年に医療保険制度改革（後期高齢者の窓口負担割合等）を議論してきました。結論に至っていない課題も多く残されており、引き続き「給付と負担の見直し」という難題に取り組んでいかなければなりません。

こうしたなか、田倉智之先生が著された『医療の価値と価格——決定と説明の時代へ』は、まさに延頸鶴望の書と言えます。本書の趣旨は「医療・介護システムの存在の重要性を改めて考えてみる」ことにあります。すなわち、「医療分野における種々の価値や適正な価格水準を広く予見性をもって論じることが可能であれば」「価値の見える化や各種の医療事業の採算を担保する価格水準により、医学の進歩や国民の幸福を後押しすることにもつながる」（本書p249）のです。本書は前段で、医療の価値と価格について、保険財政や人口動態、産業構造から問題提起し、費用（資源消費＝医療コスト）と効果（診療成

果＝患者アウトカム）のバランスで価値を算定する費用対効果を説明、その上で診療報酬制度における公定価格の仕組みを整理しています。後段では、疾病予防（循環器疾患や糖尿病）、内科診療（がん化学療法）、外科治療（人工関節や腎代替療法）、検査・診断の各ケースを用いて、費用対効果による具体的な価値分析を示してくれています。

著者は、国民皆保険制度の持続的な発展には、患者・家族等の医療の享受者と医療機関等の提供者が納得する、費用と効果のバランスによる価格設定を志向すべきで、「臨床（＝疾病管理）」と「経済（＝予算管理）」を一体として医療政策を進めることが肝要だと主張します。

新型コロナウイルス感染症の流行により国民の受療行動が変化し、一人一人が安易に医療に頼らないとする風潮も現れてきています。政治の世界に身を置いていると、日本国民自身がどのような国にしていきたいのか、高齢者と若者でどのように考え方が違うのか、これからの政策は政治主導ではなく国民ニーズに合わせていくべきなのではないか、といったことをよく考えます。私は今こそ、子どもから若者、子育て世代、現役世代、高齢者、病氣や障害を抱える方々まですべての国民が参加し日本の将来の社会保障について話し合う、国民会議を開くチャンスではないかと思っています。その際、本書は、われわれを正しい議論に導いてくれる道標になるでしょう。

田倉智之 著

A5判／276頁／2021年／定価3,850円（本体3,500円＋税10％）／ISBN978-4-260-04352-6／医学書院刊